

## 研修について 参加者の感想

機会がないと他の方との交流ができないので、情報を得る意味で助かりました。

皆さんの意見を聞くことができて、実りがありました。

全体を通してテンポのいい研修会だったと思います。

グループワークの時間がもっとあれば良かったです。普段関わることのない方々と話できて良かったです。

また見学の機会があれば参加したいです。うちの園長は「今回は行けへんかった。行きたかったんやわー」と話しておりましたので、次回があればよろしくお願ひします。

いろんな方と手さぐりですが、意見を交換でき、有意義な研修会でした。

良い機会となりました。今後仕事に活かしていきます。

「まだまだ知らない福祉の世界」タイトルに表されている通り私の知らない世界でした。福祉といっても様々な障害福祉の中にもいろいろな障害や暮らしがあるのだということがわかり参加してよかったです。

他施設の方とお話できて楽しかったです。みなさん悩みながらも目の前の支援に打ち込んでいらっしゃる。私も頑張ろうと思いました。

来年以降も続けてください。

現場を見ることができるとはよい。

時間が不足がちでしたが、違う職場、様々な立場の人たちと同じテーマを共有し、話し合えて視点が広がった気がします。

建物、人、とよく考えることのできる時間でした。初めて救護施設に来させていただきましたが、とてもあたたかい場所と感じています。

## まとめ

今年度の事業は、「まだまだ知らない 福祉の世界」のテーマで、日野町の「救護施設 ひのたに園」と、大津市月輪の「カーサ月の輪」の2か所のご協力で実施できました。関係の施設の皆様には、大変お世話になりました。誠にありがとうございました。

参加者のアンケートからは、「タイトル通り知らない世界だった」「新たな発見があった」「意見を交換でき有意義であった」との感想が多くあり、好評でありました。

今回、ひのたに園の取り組みやカーサ月の輪の「フリースペース」など、まだまだ一般的でない先進的な取り組みの様子を伺えたのが収穫であったように思います。また、それぞれの講師が、ご自身の歩んできた道と「福祉の世界」との関わりから、先人に学んだことを受け継ぎ発展させてこられた姿やその思いを聞かせていただき、参加者の共感を得ると共に今後の展望や進むべき方向性などが、示唆されていたように思われます。実際に参加者の立場や職種は様々ですが、日々の実践に活かしてもらえるようなヒントを持ち帰っていただいたら、このうえない喜びです。

糸賀一雄記念財団 事務局長 瀬古 隆

## 参加者 所属団体

滋賀県立近江学園、滋賀県健康医療福祉部障害福祉課、グループホームわいわい、滋賀県社会福祉協議会、ひのたに園、小鳩の家、子ども青年局虐待・非行防止対策係、養護老人ホーム さぬがさ、社会福祉法人グロー企画事業部、なんてん共働サービス秋桜舎、六匠本部、ワイワイあぼしクラブ、中央子ども家庭相談センター、社会福祉法人グローホーム支援室、くらぶはうす わらく、健康福祉政策課・企画調整係、かやぶき心、滋賀県障害者自立支援協議会、せせらぎ苑(順不同)

## 今後の研修 について

次年度におきましても、継続して同じテーマで、「生きづらさを抱える人々」を支援している各種の施設や活動を紹介していきたいと考えています。また、どなたでも参加しやすい時期や場所を設定する予定です。内容も今回と同じような普段、仕事の中での悩みや心配事を語り合えるようなものにしていきたいと、検討中です。参加された方からは、時間が足りなかった、短かったというご意見もあり全体枠の構成についても少し見直しを進めてまいります。次回も多くの皆様のご参加をお待ちしています。

## 先人に学ぶ 「福祉しが」 人づくり発信 拠点事業

# まだまだ知らない 福祉の世界 実践者育成 研修レポート



変化を繰り返す社会の中で、現行の福祉制度ではカバーしきれない、生きづらさを抱えた人々はいつの時代も存在しています。今回の研修では、同時代に生きる「生きづらさを抱えている人々」に着目し、高齢・障害・児童など分野の垣根を越えて、参加者の知らない「福祉の世界」を広げる目的で実施しました。

### 先人に学ぶ「福祉しが」人づくり発信拠点事業

障害福祉の礎を築いた先人の福祉の実践と理念に関する情報の発信や、それを学ぶ機会を提供する拠点の運営を通して、試行錯誤しながら先駆的に実践に取り組み、必要があれば自ら新たな福祉サービスを創造していくという高い志を持つ福祉人材の基盤の再構築に取り組んでいます。

## 【開催概要】

### 第5回 「救護施設」ってどんな施設？

障害の種別はもとより障害の有無さえも問わない、日常生活を送るのが困難な人たちが健康に安心して生活するための救護施設。生きづらさを抱えた多様な人々が集まる救護施設を舞台に福祉の思想と実践について考えます。



救護施設  
ひのたに園  
滋賀県蒲生郡日野町松尾121

身体や精神に障害があったり、生活困窮など何らかの問題のために日常生活を営むことが困難な人が入所し、生活保護法に基づく支援により健康で安心して生活するための施設です。障害の種別や有無による利用制限はありません。支援を必要としている人を幅広く受け入れており、地域における“セーフティーネット”としての役割を担っています。

### 第6回 「子ども食堂」のいまを知る

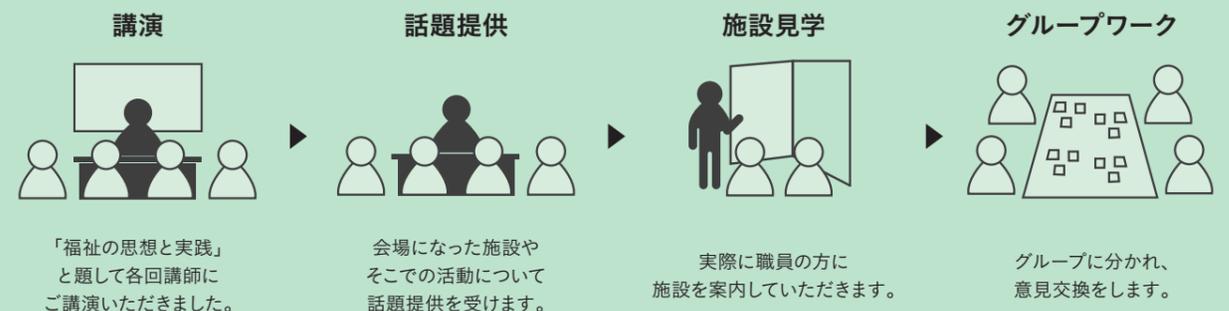
近年、急速に広がっている「子ども食堂」。子どもたちを取り巻く環境も複雑化する現代において、公の制度には頼れない民間の動きが注目されています。子どもたちを通してこれからの福祉について考えます。



特別養護老人ホーム  
カーサ月の輪  
滋賀県大津市月輪1-12-8

地域に立地する特別養護老人ホームとして、近隣住民向けのイベントや対話の機会(ワークショップなど)を積極的に開催してきた。カーサ月の輪での「学校に行きにくくなっている子どもやその親の居場所として施設を活用できないか」という発言がきっかけとなり、子どもが安心してのびのび過ごせる夜の居場所“フリースペースカーサ”がスタートしました。

## 研修の流れ



講演

福祉の思想と実践

北岡 賢剛 氏

(社会福祉法人グロー理事長)

「例えば、障害者が結婚や出産をしたい時、医者や親でさえも止めてしまう。福祉サービスの整った現代でも、障害者への偏見はまだ我々の意識の底に残っているのではないだろうか。」これまで滋賀県が全国に先駆けて行ってきた取り組みに数多く携わってこられた北岡氏。糸賀一雄らの思想、当時の状況や信楽青年寮での経験、今後の社会への提案について、実際の事例とともにお話いただきました。



「ケアするためには、ケアされることが必要」

感情労働であることを自覚し、福祉に従事する人自身が倒れて、支援が途切れないうちにしていきたいと思いました。

滋賀から新しい取り組みが起り、それがベースになり出でてきた制度が多くあります。これからも私たちは福祉の実践者として誰も見逃されないように、「自覚者が責任者」として目の前の支援と向き合っていくことが大切だと改めて感じました。

障害者の方の結婚・出産 どう支援をしていくのか。

誰のための「福祉」で何のための「福祉」なのか。君(利用者・仲間)の本当の思いとは... 耳を傾けられているか。

障害者の願い...役に立つ、楽しい、みんなと一緒に働く

「支援者の自分」と「本来の自分」

あると思うな、非番・公休・夏休み

話題提供

救護施設における自活の取り組み

齋藤 誠一 氏

(ひのたに園 副園長)

救護施設ひのたに園について、どんな方が入所しているのか、どんな支援が必要とされているのか。入所理由や退所状況など、多様な人々が集まり、それぞれの支援が求められる施設での現状について、具体的な数字をふまえてご紹介いただきました。



看取りがあると聞き、高齢によるものだろうと考えていましたが、亡くなった方の年をみると、60代の方もおられ、病気で亡くなったことを教えてもらいました。「看取り」の考え方、見方が少し自分の中で変わったと感じています。

救護施設における介護業務の割合の多さ

年齢層や背景もバラバラで、一人ひとり支援の方向性を定め、退園へ支援していく事の難しさを感じました。

福祉の職場は長いですが、救護施設はこれまで直接関わることのなかった施設だったので、聞くこと、見るものがとても新鮮で勉強になりました。

施設見学



施設見学の様子。施設の図面を手に、生活棟や食事棟などを見学し、利用者されている方の普段の様子も垣間見ることができました。

初めて救護施設を見学させていただき、どのように利用者が生活されているのかイメージしやすかったです。

「救護」、目からは「緊急、救急に保護する」といったイメージを受けますが、実際は数十年の暮らしがあり、「地域で縁のある人々と暮らす事」の難しさを感じました。

生活棟がとてもキレイだった。

食事棟で男女が一緒にすごしていた。

広いスペースをゆったり活用されており、みなさんから落ち着いた様子を感じました。

自立の方への就労支援に力を入れておられるという事で、介護支援が多く大変だとは思いますが、利用者間だけでなく職員にもいい刺激があるのではないかと思います。

グループワーク

4～5人ずつ6つのチームに分かれ、グループワークを行いました。講義や施設見学で印象に残ったことから始まり、ひのたに園の方に質問したいこと、職員の方は今抱えている課題について、様々な意見が飛び交いました。



グループワークの様子。自己紹介の後、講義や施設見学でそれぞれが感じたことや印象に残ったことを話し合います。



職員の方に質問したいこと、施設の抱える課題について、意見交換を行いました。



時間を過ぎても終わらないほど、活発に話し合いが行われていました。

質問とそれに対する回答

Q. 退所までの支援はどうしている？

A. 障害者手帳の取得を支援する、権利擁護事業をコーディネートする、養護老人ホームへの移行の支援やそこに向けた介護認定調査の調整などケースバイケースです。中には、ご自身で福祉事務所や不動産会社とやりとりをして、就労先や住まいを見つける方もいます。また、障害分野では、委託の相談支援所を利用することもあります。様々な方がいらっしゃる中で、その人達が地域で暮らしていくために必要なコーディネートをそれぞれに応じた形で、会議を開いたり措置元の福祉事務所とやりとりをしています。

Q. 退所した人のアフターフォローはどのようにしている？

A. 現在のところ、きちんとした形のアフターフォローができていない状況です。特に障害者手帳を持たない方には地域での支援が届かないため、課題となっています。

Q. 職員のストレスケアは？

A. 特定の職員の勤務時間が長時間になっていないかなどはチェックしています。また、園内の衛生管理委員会で月に1回情報を共有し、必要に応じて対処しています。

救護施設の抱える課題や支援の難しさ

- ・既存の福祉サービスだけでは補いきくい生きづらさを抱えておられる。
- ・お金の管理ができない利用者への支援
- ・入所前の情報が少ないために短期間で自主退所したり知らないまま出て行った方への関わり
- ・自立度の高い方への支援
- ・生きづらさを抱えた人たちが誰かに相談することの難しさ
- ・制度上の壁があり、本来過ごすべき生活の場へ移行できないジレンマ

Q. 地域との関わりは？

A. 年に数回、文化祭や運動会、お花見会などを行う時に地域の方にお声掛けして、来ていただくこともあります。また、日中活動の中で近所の清掃活動を行ったり、町の文化祭に作品を持って行ったりもしています。今後も、様々な機会が地域の方々との関わりを持って、取り組みが広がってほしいと思っています。

Q. 日中は何をしておられるのでしょうか。

A. 利用者それぞれの状態像に応じてグループ分けを行い、日中活動を提供しています。たとえば、社会復帰に向けた内職作業や、身体機能の維持を目的としたレクリエーションなどです。他にも、生け花や書道などのクラブ活動も行っています。

Q. 障害のある方とそうでない方が同じ施設で暮らすことの難しさ、良さはあるのでしょうか。

A. 障害の有無を含め、多様な状態像の人たちが暮らしていることで、個々のニーズに合わせた支援を提供することが難しくいつも苦慮しています。互いの障害特性の不理解から利用者同士のトラブルもあります。良いところは、自分で車椅子を動かすことができない方を歩ける利用者が押す姿など、支え合いの場面見られることです。

- ・救護施設においての高齢化、要介護者の増加
- ・利用者が地域移行するための支援は幅が広く、福祉施策の知識や就労のためのスキルなども求められる。
- ・どういう人かわからない人を受け止める難しさ。年齢だけでなく、支援の質が違う。
- ・年間約50人が入れ替わるため、一人ひとりの違いを把握する工夫
- ・生活保護以外の福祉サービスにつなぐりにくい。

講演

福祉の思想と実践  
久保厚子氏

(全国手をつなぐ育成会連合会会長)

「今の日本は高齢化、出生率の減少、親の負担の大きさ、虐待など様々な問題を抱えています。障害のあるなしに関わらず、子どもたちが幸せに生きていくために、本人を中心に地域や支援者として、私たちが多様性を受け入れ、支えていくことが必要です」日本の現状や糸賀一雄の思想をふまえて、これからの子どもの福祉のあるべき姿についてお話いただきました。



子どもを家庭だけでなく、**地域社会の中で育てることへの大切さ**が高まってきている。

障害をもつ子どもと、支えて行く親と、周囲の人々や地域の人々の結びつきがまだまだ浅いこと…。

2025年以降に75才を迎える人間として、介護してもらえるのか…

久保さんの熱い想いが伝わりました。

久保さん自身の思いとしてお話を聞けたことがよかったです。

子どもへの支援だけでなく**親への支援**について

あまり詳しくなかったことであったので、現状が概ね理解でき、新たな知識となりました。

**本人・支援者・市民の3者共働**

社会が子どもを育てるしくみづくり

話題提供

福祉施設での  
子どもの居場所づくり  
日比晴久氏

(カーサ月の輪 施設長)

地域の方々と連携し、特別養護老人ホームの新たな可能性を広げているカーサ月の輪。フリースペースカーサ誕生までの経緯から、運営体制、大切にしていること、今後の課題について、子どもたちとのエピソードとともに詳しくご紹介いただきました。



マンツーマンで子どもが**大人を独占**できる体制づくり

「カーサ月の輪」さんの取り組み、ご苦労が素直に伝わるお話でした。

生きづらさを感じている子ども達が、**自分の居場所**と思ってくれている事が本当の喜びなんだなあ…と思いました。

フリースペースの目的として「**学校**」に行くことは目的として考えていない。

お風呂、ごはん、24時間の人員体制があれば、フリースペースはできる。

**子どもの変化**を見逃さないことの大切さ…。

施設見学



施設見学の様子。2つのグループに分かれ、特別養護老人ホームとして普段高齢者の方が生活されているところをご案内いただきました。



重度障害のある人の入浴にお風呂を提供している取り組みは、他にももっと広がってほしいと願います。



清潔な施設で広々とした場所に、こんな施設に入りたいと思った。

入居されているみなさんのご迷惑になったのではないかと心配になりました。

グループワーク

3～4人ずつ4つのチームに分かれ、グループワークを行いました。講義や施設見学で印象に残ったことから始まり、自分の身近で困っている人とその人たちの助けるアイデアを出し合いました。



グループワークの様子。職業も立場も様々な人が集まり、自己紹介から始めます。



それぞれの感じたことや考えを視覚化して意見交換をします。



最後に、それぞれのグループでの意見やアイデアの情報を共有しました。

身近で困っている人

その人たちを助けるアイデア

たべる物がない  
作り方がわからない人

朝食の場の提供(たとえば若者に)

病気に対する治療食  
何をどう作って食べるか

配食サービス

障がい重度ながら在宅生活を  
している人の入浴が大変。

障がい者サービス事業所以外でも、  
入浴サービスを積極的に受け入れる。

地域以外の学校に通っている子  
供が住んでいる地域の子とどうか  
かわって過ごすか。

学童保育。特養で学童保育として  
いる所があった。ユニット内子どもは自由  
に行ける。宿題を入所者が見る。

耳が遠くなった人の車の運転  
透析への通院

介護タクシー  
障がい者団体の移送サービス

グループホームに暮らしたいが、  
受け入れてもらえるところがない。  
精神科病院から地域に移行する  
ところが、みづかりにくい。

同じような生きづらさを感じている人  
たちの交流できる場をつくる。

1人で住んでいる祖父(89)  
祖母は入所中

一緒にすごせる場所・時間を作る。

実家の母(84)が元気過ぎて、な  
かなか免許を返上しない。

元気なお年寄りと同じお年寄りに元  
気をわける活動をする。

出かけるのが難しい高齢者

買い物支援  
施設の送迎車の活用

学用品の不足  
(そろえられない。貧困ではない)  
→学校行事への不参加

使わなくなったものがあれば、寄付し  
てもらう。ポスターで募集するなど。  
学用品等の備蓄システム→地域の子  
に使ってもらえる仕組み

仕事など忙しいシングルマザー

1人親世帯対象のイベント開催

ママ友がない  
(相談相手がいない)

家族支援会

独居老人の話相手がない

独居老人など参加するイベント